

《研究報告》

近世日本にもたらされた東アジア先端医学、  
医書、医用食材：  
現代の薬膳や朝鮮人参へも視野を広げつつ

向 静 静\*

Advanced East Asian Medicine, Medical Books, and  
Medical Food Ingredients in Early Modern Japan:  
Expanding Perspectives towards Modern Medicinal Cuisine and Ginseng

Jingjing XIANG

This brief research discusses the progress and prospects of the author's research on the history of medical thought in early modern Japan, primarily focusing on the Edo period. It specifically examines the concept of Retro Thoughts in early modern Japanese medicine and explores the author's recent research interest in ginseng. This brief research is divided into three parts. The first part covers the author's doctoral program research, which includes the Retro Thoughts concept in ancient Chinese medicine and the movement of doctors between Ming-Qing China and early modern Japan. The second part focuses on the author's post-doctoral research, which explores the application of classical medical books like *Shang Han Lun* (*Treatise on Typhoon Fever*) during the plague epidemic in early modern Japan. The third part presents the author's outlook on future research topics. While considering modern medicinal cuisine, we also want to focus on the cultural discourse of "the unity of medicine and food," particularly the dissemination of medicinal plants such as ginseng and the import/export of medicinal herbs.

キーワード：近世日本医学思想、「復古」、医学と儒学、東アジアの医の交流、薬用人参

Keywords: medical thought in early modern Japan, Retro Thoughts, medicine and Confucianism, exchange of medical and Confucian ideas in East Asia, ginseng

---

\* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構助教  
xiang@fc.ritsumei.ac.jp

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2023, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.4, pp.92-95.

## 1. 近世日本医学と明清中国：「復古」および「ヒト」の移動

本報告は、近世日本（主として江戸時代）の医学における「復古」思想を手がかりに、筆者がこれまで進めてきた近世日本医学思想史研究の進捗と展望を報告し、さらに最近の筆者の研究関心である具体的な「モノ」としての医食に関する研究について、その課題を論じるものである。

博士後期課程在学中、筆者は17世紀末から18世紀後期にかけて大きな潮流を形成した医学流派である古方派医学を主な研究対象とした。具体的に、古方派「四大家」である後藤良山（1659～1733）、香川修庵（1683～1755）、山脇東洋（1705～1762）、吉益東洞（1702～1773）を取り上げ、彼らの「復古」思想の内実を明らかにすることで、古方派医学が内包する多様な性質を検証した。すなわち、古方派医学と言えば『傷寒論』への「復古」に局限するような従来の概括的見解をその限定性から解放し、より総体的に医学の「復古」が持つ意味を位置づける試みを行ってきた。また、近世日本医家の医書研究における中国古典経書の影響を解明した。古方派医家らの医書研究・医学活動を素材に検討を行った結果、彼らの医学は、中国古典医書のみならず、『論語』『孟子』『周礼』『尚書』といった儒学の経書の影響下で営まれていたことを明らかにした（向, 2020）。

それに加えて、古方派の医学が伊藤仁斎（1627～1705）、荻生徂徠（1666～1728）、伊藤東涯（1670～1736）、山県周南（1687～1752）といった古学派儒者とのネットワークのなかで展開されたこと、東アジア儒学圏との関係、すなわち、明清中国と近世日本との間において医書だけでなく医家たちも海を越えて移動し、診療活動や中国医書の翻訳・出版に携わっていたこと、さらに明清期の「錯簡重訂派」の医家の『傷寒論』研究の手法が古方派に深い影響を与えていたことなどを明らかにしてきた（向, 2020）。

このほか、明清期江南・福建地域からの来日医家に注目することで、彼らの長崎での医療活動、および日本医家らとの交流活動の実態を検討した。明清期に来日した中国人医家は、凡そ二つの期間に集中していたことを明らかにした（向, 2020）。一つは、17世紀の明清交替期である。もう一つは、18世紀の吉宗政権期およびそれ以降のことである。一つ目の時期として、明が滅んでからの40年間、戦乱を避けるために来日した医家が多かった。彼らは来日後、積極的に日本の医家とコミュニケーションを行い、医書出版にも携わっていた。また、彼らの医学は藩主に信頼され、侍医としても活躍していた。例えば、許儀後（生没年不詳）は薩摩藩主・島津義久の侍医となった。独立性易（戴曼公、1596～1672）は岩国に何度も往診して、藩主・吉川広嘉の診療を行った。

二つ目の時期として、当時将軍であった吉宗が医薬を含めた中国の文化や文物に強い関心を示していた時期が挙げられる。将軍になった後、吉宗は実際の治療においても優れた中国人医家を日本に招聘した。興味深いことに、中国人医家の人選は中国船船頭（商人、船の責任者）に任されていた。そして、吉宗期に来日した医家は、江南・福建といった沿岸部に集中し、かつそれらの地域での高名な医家として知られていた。彼らは来日後、長崎での診察を行ったほか、中国医書の日本での解題・出版に携わり、日本の本草名に対応する中国語の名称を解説し、同定作業を行い、その結果を書物にまとめた。例えば、蘇州から来日した医家・周岐来（1670～没年不詳）と福建から来日した朱来章（1679～没年不詳）の共同作業である『享保十一年八月十九日南京船所載来唐医周朱等復言』（『享保復言』）がその代表として挙げられる。

治療・医書刊行作業のほか、来日した中国人医家は日本人一般医家や幕府の医官と筆談を通してコミュニケーションを取り、特に医学知識について議論を行った。例えば、蘇州の医家・趙淞陽

(1663～没年不詳)は日本の医家香月牛山(1656～1740)の『薬籠本草』(1734)に序文を寄せたほか、書簡を通して医学について議論をし、その内容を『薬籠本草』に付した。

さらに、来日した中国人医家の日本での活動を考える際に、長崎の中国人医家間で形成されたネットワークの存在を忘れることはできない。例えば独立性易は1653年に長崎に到着した後、陳明德(潁川入徳、1596～1694)の住居に身を寄せた。このほか、陳明德は、浙江から来日した陳元賛(1587～1671)とも親交を結んでいた。

## II. 古典医学書の実用と疫病

筆者が博士論文を提出した2020年3月は、時期的に言えばちょうど新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染が世界に爆発的に広がっていた。感染者への差別、病気に関するデマや薬・食品・日用品などの買い占めが広がる光景は、筆者が日頃読んでいる史料に記載されているそれと変わらないものであったことに気づいた。しかも、新型コロナウイルス感染症に対し、日本・中国大陸・台湾をはじめとする東アジアの国では、漢方・中医の治験が試みられていたが、そこで軽症者の治療に用いられたのが、2000年前の後漢の医家・張仲景が伝染病治療法を論じた中国の古典医書『傷寒論』に基づく生薬の利用であった。そこで、筆者は『傷寒論』を近世日本の古方派医家たちがいかに解釈し、そこからどのような独自の治療法を実践していったのかに注目し、研究を進めるようになった。

つまり、医家の『傷寒論』研究が、『傷寒論』などの受容形態のみならず、これを応用した疫病の治療とも大きく関連していたことを明らかにすることで、『傷寒論』が東アジアに広まっていった背景を解明したのである。つまり、古方派の「復古」的医学思想は、実際の疫病に対応しようとするなかで実証性を高めていった。彼らは「復古」を掲げつつも『傷寒論』をはじめとした古典医学書に独自の解釈を加え、それを実践することで目の疫病に対応しようとしたのである。例えば、山脇東洋・吉益東洞は当初「陰陽五行」「五臓六腑」を重視する後世派医学を学んだものの、実際に治療を行うなかで、その「温補」に偏る治療法を懐疑したことから、医学の「復古」を唱えるようになった。近世日本の医家らが、伝染病治療法を論じた『傷寒論』を始めとする医書に注目した背景には、当時蔓延していた梅毒・麻疹・痘瘡・熱病・コレラといった疾病、またその治療法をめぐる模索があったのである(向, 2022: 17-30; 向, 2023: 267-289)。古方派医家は、医書の「実用」「活用」を強調したが、そこには「復古」を掲げつつ旧慣を踏み越えていく思考法があった。それこそ彼らの「復古」という思想が有した一側面であった。このように、日本内部にとどまらない儒学をはじめとする諸学との深い関係とその変容、さらに実際の病に対応しようとする実践が交差するなかで、様々な治療法が生み出され、古方派の医学が展開されていった。そしてこうした展開のうえに、近代医学受容の方向性も定められていくこととなったのである。

2023年5月に刊行された拙著『医学と儒学: 近世東アジアの医の交流』(人文書院)は、博士論文に大幅な修正を加えるとともに、上に述べたような学位取得後に取り組んできた研究を取り入れたものである。そこで、医家が取り組んだ疾病をめぐる社会的背景、そして東アジアの医学・学術的思潮との関係などに着目しつつ、近世日本に発生した医学の「復古」運動を検討した。こうした古典医学書の再解釈と実践は、同時代における儒学をはじめとした諸学と深くかわり、さらに明清期の医家との交流のなかでなされた、きわめて学際的かつ広域的な営みであった。

### III. 今後の研究課題と展望

以上のように、筆者のこれまでの研究では、日本の医書・医学をめぐる思想を、従来の一国内での内在的な発展過程としてではなく、東アジアという圏域における相関的な発展の軌跡として検討・把握することで、近世日本医学史を再定位した。今後の研究課題として筆者が構想しているのは、次のような問題である。

ここまでみてきたように、近世日本と明清中国の間に医学に関する「ヒト・モノ・情報」の交流が存在していた。「ヒト」としての医家、「情報」としての医学情報、「モノ」としての医書が往来していた。このほか、「モノ」の往来として、薬物の輸入も挙げられる。近世日本において、長崎貿易で最も多く取引されたのは生糸で、続いては薬種であるという（河添, 2014: 182）。例えば、大黄・黄連・桂枝・薬用人参のような薬物があり、そのなかでも最も多かったのは薬用人参である。長寿や万能薬と言われた人参のなかで、当時一番人気が高かったのは、朝鮮産のものであったが、中国商船によって長崎にもたらされた唐人参（遼東種）も売っていた。人参の価格が高騰し、「娘を売って人参を買う」ことがしばしば起こるほどだったと言われている。17世紀後期頃から、日本では異常なほどの人参ブームが沸き起こっており、いくら輸入しても需要に追いつかない状況にあった（田代, 1999: 56）。こうした人参ブームは、当時の為政者から見て金貨流出に繋がりにかねない点で、頭の痛い問題でもあった。吉宗は、この問題を解決するために人参の国産化計画を積極的に進めた。長年にわたる試行錯誤によって、栽培技法が確立され、1728年には家康を祀る日光において、日本国内で初めて人参栽培が成功した。その後、吉宗は、国産人参の利用およびその普及に力を入れ、人参は大衆的な医薬品になったのである。

それは現代につながる薬用人参ブームのルーツである。現在においても、薬用人参の栄養素や効能によって「万能食」とも称され、滋養強壮や体のリズムの改善があると評価され、新陳代謝を促進する効果、美容効果があるとも評価されている。近年では「医食同源」やそれに基づく「薬膳」などにも注目が集まっており、薬用人参に対する高い関心もそれと結びついている。薬用人参は、世界中特に東アジアにおいて、人気のある健康食品となっており、薬膳としては「参鶏湯」や「人参茶」が親しまれている。現在は、東アジアの医学的交流の研究について、人・知識・書物の交流のみならず、医食に用いられる具体的な「モノ」の交流や伝播の面からも考究を深めていこうとしているところである。今後は、現代の薬膳も見据えつつ、「医食同源」の文化論、特に薬用人参をはじめとする医療用作物の伝播や薬草類の輸出入などの展開にも注目していきたい。

※本研究報告は、科研費・研究活動スタート支援「近世・近代東アジア思想圏における医書研究——『傷寒論』の受容・展開・還流を中心に」（21K19971）の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 河添房江（2014）『唐物の文化史：舶来品からみた日本』岩波書店。  
向静静（2020）『「復古」と医学：近世日本医学思想の研究』立命館大学博士論文（文学）。  
——（2022）「近世日本における『傷寒論』と漢方医学：麻疹・痘瘡・腸チフス・風邪の治療から」『立命館アジア・日本研究学術年報』第3号、立命館大学アジア・日本研究所、17-30頁。  
——（2023）『医学と儒学：近世東アジアの医の交流』人文書院。  
田代和生（1999）『江戸時代 朝鮮薬材調査の研究』慶應義塾大学出版会。